

研究論集 第十卷 第二號

研

究

經濟配分の若干問題

——諸家の批評に答ふ——

大熊信行

第一序 説

第二 勞働還元の問題

第三 マルクス主義批評家の一例について

第四 土方博士の『配分思想』について

第五 日本的マルクス主義批評の特性について

第六 マルクス・ロビンソンの再發見

第七 經濟配分比例の規制要因は何であるか？

第八 なにゆゑにマルクスを読むか？

第一序 説

經濟配分の問題についての基本考察ならびにそれに關聯ありとみとめられる諸學説に關する學史的研究は、過去十五年にわたるわたしのほとんど唯一の題目であるが、終始かはらざる題目でありながら、成果が微々としてあがらないことは、かへりみて恥かしい次第である。かりに經濟學をいはゆる理論經濟學の意味に、最狹義に、

經濟配分の若干問題 —— 諸家の批評に答ふ

解釋したとしても、その理論の範圍内においてすら配分問題の領域は一定の限界をもつのであつて、しかもその限界内ですら仕事を終了したわけではなく、いはんや配分問題と他の理論的な諸問題との交渉に關する考察では、十分満足な見透しすらなしとげられたといふことができないのである。

わたしの信ずるところでは理論科學の領域にはなにひとつ氣まゝにすゝめうるやうな仕事は存在せず、いはゞ煉瓦積みと同様であつて、一箇の煉瓦が正しくおかれてゐないならば、そのうへに他の一箇の煉瓦を正しく安全に積みかさねることはできない。數學の理論や問題が數學の領域内で客觀的なものであるのとおなじ意味で、しておなじ程度で、經濟の理論も問題も客觀的性質のものでなければならぬのであるが、配分理論ないし配分問題といふものはそのやうな性質のものに屬する。わたしはさう確信する。この研究が終始無力なものにとゞまつてゐるとしたならば、それは研究者の學力と努力の不足によるのであつて、題目そのものが無意義なためではない。もし研究者に眞にその人を得てをつたならば、配分問題についての基本的考察も、學史的研究も、わたしが現になしえたところのものを遙く越えて發展してゐたであらうし、したがつてそれらが國內の學界の認承をうけた速度も、程度も、範圍も、現に見るところとは異なるものがあつたであらうとおもはれる。のみならず、それらが學界一般から注目され、批評をうけた程度も、或は大いに趣を異にするものがあつたであらうとおもはれる。しかるにこの研究が現に見る程度の位置に搖曳してゐるといふのは、わたしの個人的な懈怠の證明ではある、題目そのものに固有の可能性や發展性の限度の證明ではない。——と、さう主張することがすでに一つのきはめて主觀的な自負の表現であつて識者の笑ひに値することかもしれないのであるが、まづ所懷の一端を披瀝して論題の糸ぐちとする。

わたしのこれまでの研究にたいする批評の多くはマルクス主義者の側から來たのであるが、それ以外の一般經濟學者の側から批評を受けてゐないのではない。わたしはその答を怠つてゐたといふ非難をまぬかれることができない。第一には高田保馬博士の拙論『配分原理』（東京商科大學『商學研究』第七卷第一號所載・拙著『マルクスのロビンソン物語』（一九一九年）所輯）にたいする一批評である。第二には高木友三郎博士の拙論『配分學說史考』（高岡高等商業學校『研究論集』創刊號所載・限定版同題單行本並に前掲書所輯）にたいする一解釋である。第三には伊東岱吉教授の拙論『マルクスのロビンソン物語』（『改造』第一一卷第六號所載・前掲書改稿所輯）にたいする一批評である。

第二 勞働還元の一問題

第一の批評は、問題が或意味で中心點からはなれたところに移つたとはいふものの、高田博士の勞働價值說批判における根本思想の一点點であり、理論問題としてすこぶる興味のあるものである。わたしは勞働價值說を完全な學理と信じてゐるやうな一部思想家と類をおなじくするものではないが、しかし同學說の根本思想ならびに思考方法そのものについては、價值論としての性格をはなれて、なほ別に現實的な意義と根據とがあるのではないかと考へるものであつて、高田博士のいはゆる勞働の異質性還元の問題は、なにかの機會に示教を乞ひうるまで思索をとげたくおもふのである。これまでの範圍では偶然的の機會につきのやうな見解の一端を述べたことがあつたにすぎず、それも學界において發表できるやうな形式を執つたものではない。——『おもふに勞働の異質性還元の問題を提起された高田博士のマルクス批判は、その論旨においてさきにアモン教授がリカアドオ批判にお

* 高田保馬博士「勞働價值說の吟味」（一九三一年）11—16頁。

** 高木友三郎博士「生の經濟哲學」（一九三三年）432頁。

*** 伊東岱吉教授「勞働價值說の基本的考察」（一九三三年）三田學會雜誌二六卷三號79—113頁。

いてとつたものとおなじ系統のものである。だが、いづれにせよ、日本のマルクス學派がこの批判を反駁しえなかつたことは事實であり、博士によつてこの問題はマルクス價值論の「中心難點」とよばれてゐるのである。われわれはこゝで價值論の問題にはいることはできないけれども、つぎの一點を指摘して博士の批判にたいする駁論の用意がどこにそなへられべきかを示唆するにとどめたい。——米、生糸、棉、鐵、石炭等々の貨物は、人間諸欲望の對象としてそれぞれ決定的に異質性のものである。鐵が棉の用途に代位することは不可能である。棉が鐵の用途に代位することも不可能である。これらすべてのものは交互的に代位すべからざるものである。しかるに人間の勞働力にはこのやうな意味における異質性は存在せず、一方的代位の可能なものであるといふことが注意されなければならない。いかにもハイフェッツの演奏をだれも代理することはできないが、ハイフェッツ自身が烟突掃除夫のしごとを代理することはできるとく熟練勞働から不熟練勞働への代位は一般的に可能なのである。いかなる習練をもつても到達しえない稀有の才能については、これにたいして強い社會的需要が存在するかぎり勞働價值の原則はあてはまらず、稀少性價值の原則があてはまるのであるが、この例外は勞働價值思想の構造を擊破するにたるものではない。生産が特定の地域に制限されてゐる或種の葡萄酒が勞働價值原則の圈外にあることを指摘したものはまさにリカアドオ自身であつた。稀少性原理は勞働價值原則の補助的原理たることを超えがたい。……勞働價值説の構造は經濟社會の全機構にたいする認識であるが、限界利用説や稀少性説は本來的にさういふ構造をもたないのである。』*で、いまはしばらくこの引用文にとどめておく。

總じて主觀學派の價值學說なるものは、一個人とその所有財との一般關係の認識から出發したものであり、だからして社會關係的な經濟の基本規定の認識に到達するものではない。のみならず人類と自然との一般的な交換

* 拙著「文學のための經濟學」（一九三三年）261—263頁。

關係（人類全體の對自然關係）の認識を根柢におくものでもない。勞働價值説が素朴な學理のなかに經濟生活の全體性にたいする認識をそなへてゐるといふ一事は、いはゞ久しく看過されてゐる盾の一面であり、限界利用學説や稀少性原理のごときものの企ておよばざる根本構造をもつたものであるといふことは注意に値する一事ではないかとおもふのである。といつて、それが勞働價值説の全般的な擁護の理由となるべきものではなく、また右にあげた見解が高田博士の當面の批判にたいする駁論として十分有效であると主張すべきものでもない。こゝではたゞ今後の問題の方向を示すだけで満足しなければならない。『勞働の同質性、又は還元可能の場合に於けるこの學説の結合が鮮明に又犀利に仕遂げられてゐる』といふ博士の簡潔卒直な評語は、すでに拙作『配分原理』が日本學界に期待しうるかぎりの最大の承認であり最上の評價であつて、同論文の主題そのものについてはむしろ残された何ものもないのである。

第三 マルクス主義批評家の一例について

第二の高木博士による一解釋といふのは、わたしの研究をいきなり土方成美博士の所説に結びつけたものであるが、そのやうな解釋の典據として想像される唯一のものは山田盛太郎氏の批評である。その山田氏の批評にたいしては、マルクス主義批評家諸氏に一括的に答へた他の機會に、忌憚のない言葉をもつて酬いたことがあるのである。^{*}^{*}それを幾年後の今日、ふたゝびとり上げる必要が生じやうとはおもはなかつた次第であるが、たまたま高木博士の所説の典據となつた形跡があるといふことになる、こゝに煩をいとはず改めて引照してみなければならぬことになる。山田氏の拙著批評はしかし一九三〇年前後における日本のマルクス主義者の文章の一

* 『限界效用説を基調としながら勞働價值説の主張の骨子を取り入れること』
前掲「勞働價值説の吟味」13頁。

** 拙著「配分理論」序文、經濟學全集第六卷（一九三〇年）。

典型であり、當面の問題をはなれて觀察してみても、「古文書」としてはなはだ興味ある資料だとおもはれるので、いま全文を轉載して讀者の自由な判斷にゆだね、あはせてこの研究が前後の經過中に遭遇した最も猛烈な批評の一例として記念しよう。

『社會科學』第五卷第二號（一九二九年・九月）の社會科學文獻批評欄において、經濟學一般の擔當者は宇野弘藏氏（東北帝大教授）、經濟學史の擔當者は山田盛太郎氏（東京帝大助教授）である。後者はその擔當欄に序していふ。——『マルクスは、十九世紀における獨逸の古典哲學、英國の古典經濟學、佛蘭西の社會主義の「天才的完成者」である。と（レーニン）は記してゐる。』そのマルクスは、リカアドをもつて、古典經濟學の「完成者」となりとする。そこで二人の關係は明瞭である。その關係の把握の度合ひはひとよつて異なる。以下は、最近に現はれた文獻につき、三様の型相を示すであらう。』と。そして舉げられたものは(1)堀經夫『リカアドの價值論及び其の批判史』(2)河上肇『資本論入門』第一卷、上冊(3)大熊信行『配分學說史考』第一冊の三種であるが、第一種については『マルクスを俗化するの危險性』を含むものとし、第二種についてはマルクスがリカアドを批判する關係にあることの認識に満足の意を表し、そして最後に第三種についてはリカアドとマルクスとの關係の抹殺であり法則否定であるとする。第三種についての全文はつぎのごとくである。——

大熊信行『配分學說史考』第一冊、（昭和四年三月十一日發行、五二頁、附錄三一頁）

本書は、限定版『研究論集』創刊號所輯のものである。片々たる小冊子。

茲にも一人の配分學者がある。何れその末流でもあらうか。だが驚くではないか。著者は『いまだ何によ

つても試みられたことなく』（三頁）云々と、そのイニシアチブを要求する。念のため注意しておく。これは『マルクスのロビンソン物語。價值法則の背後に在るもの』（雜誌『改造』昭和四年六月號、一四—三一頁）の筆者なのだ。マルクス排撃者の一人なのだ。その『配分』とは何物か。それは、『勞働配分の均衡に關する法則』（五頁）を基本とすると云ふ。著者は之れに對して『非發展的な非歴史的な自然法則』（二四頁）と註し、また重ねて『經濟學における理論の非階級的性質の一面』（二三頁）なりと記する。これ、生産力の展開並びに階級闘争の展開を基準とするマルクス學說の正反對をゆくもの。現在社會の『永遠性と調和』を説くもの。——そのことが二様に行はれる。其の一。著者は『マルクス經濟學』と『ブルジョア經濟學』との對立の抹殺を意圖する。例へば、マルクスと俗流ジェボンスとを同列におく。即ち曰く『配分といふ語辭はマルクスの價值論のなかにありジェボンスの價值論のなかにある』（四頁）と。其の二。著者は、リカアドとマルクスとの關係を配分觀念の發展として理解する。曰く『配分觀念はリカアドからマルクスに至つて極めて明確な、徹底的な形態をとつてあらはれた』（一六頁）と。

注意せよ。之れは、形態的^{II}並に力學的諸規定の一切の『配分』への解消。そして併せて、リカアドとマルクスとの『配分』への解消。茲に、リカアドとマルクスとの關係の把握の、第一類並びに第二類の型相と異なるところの、第三の型相が示される。第一類と第二類との差異は法則把握の度合ひである。第三類は法則否定である。*

まづ『茲にも一人の配分學者がゐる』といふ最初の文句である。いふまでもなく配分學者とは當時の土方成美

博士を指す。わたしは『その末流でもあらうか』といはれてゐるのである。土方博士の『配分』といふ概念がいかなるものであり、そして博士の經濟學が『配分』概念を中心としてどのやうに組織されてゐたかはこゝで論ずるかぎりではない。たゞそれが經濟學史的研究とおよそ縁の遠いものであつたこと、したがつてわれわれの配分概念とはなんらの關聯もなく、近似點すらないものであることを一言するにとどめる。近似點があるといへば『配分』といふ一つの用語であるが、われわれはたとへばイギリス語の Distribution といふ一語について、それが經濟科學の範圍内だけでも六七種の語義をもち、それぞれの場合にそれぞれ獨立の意味につかひわけられてゐる事實を別の機會に指摘した。わたしが『配分』といふ用語を、所得論の意味における『分配』から區別するために初めて使用したのは一九二二年（大正十一年）十月のことであり、拙作『配分原理』の第一稿『生産力配分の原理』ができたがつた時期は、土方博士が『配分思想』を中心に理論的活動を開始された以前に屬するのである。『配分』とは一言でいへばゴッセンの第二法則にいはゆる種々なる目的への資力のふりあての意味であり、それ自體、いさゝかも難解な概念なんかではない。土方博士の配分概念がそれと全く別箇のものであることを他の反面から最も簡單確實に知る方法は何かといふに、われわれのいはゆる『配分』にあたるものを博士が何と名づけてをられるかをさがすことである。博士はそれを『分配』といはれたのである。だが、このやうなことは山田盛太郎氏の批評の對象となつてゐる拙著そのものに説明されてゐることであつて、爾來わたしはそれ以上一語もつけくはへる必要を認めない。

おもふに土方博士のいはゆる配分經濟學とわたしの配分原理とのあひだに、なんらかの關聯があるのであらうといふのは、一九三〇年前後の日本の學界ないし讀書界の一部に存在した漠然たる一種の印象であつて、その二

三の徴候はわたしのいまなほ憶ひだすことのできるものである。たとへば當時ベルリンに滞在在中のこと、日本から新らしく見えたばかりの留學生N氏（K商大助教授）につかまり、配分原理は土方博士の配分論と異なるものでないではないかといふ詰問をきかされた覚えもあり、一般雑誌の懸賞論文に土方博士の『配分思想』と配分原理とを混淆してゐるのではないかとおもはれるものを見た覚えもあるのである。經濟學が日本に輸入されて幾十年になるが、大學の課程を了へても限界利用均等法則の一つさへ一通り呑みこめないでゐる日本人が多いといふ事實に徴してみれば、この科學が日本の國土に根をおろしてゐる程度は普通に信じられてゐるより遙かに浅いものではあるまいか、——これがわたしのひそかに懷いた疑問であり、憚りなくいへば土方博士の配分經濟學といふやうなものの發生も、さうした當時の日本學界の特殊事情をかへりみることなくしては理解すべからざるものではないかとおもつたのである。

おどろくべきは『配分』といふ主要な一用語が偶然共通であるといふだけで、なんの見境もなく兩者を一緒にして考へるといふ態度であるが、もしそれを本氣でやつてゐるのなら、これほど子供じみた、これほど日本の科學的水準の低さを語る實例もあるまいとおもはれる。が、山田氏は果たして兩者を同一物と考へたのであらうか？ 兩者を同一物視しようとする衝動はあつたにせよ、むしろ一つの惡謔として右のやうな言葉が放たれたものにすぎないとわたしは見るのである。同氏の批評の全體にたいしては後段に節を改めて酬いであらう。

第四 土方博士の『配分思想』について

山田盛太郎氏においては以上のとおりである。しかしそれが高木友三郎博士の解釋においてはどうなつてゐる

であらうか？

高木博士の學位論文として知られてゐる『生の經濟哲學』といふ大冊の書物から問題の一節を引きぬいてみる。これはまた私信によるわたしの警告にもかかはらず、同書の抜萃本たる『厚生經濟論』といふ書物にもかゝげられたものである。^{*}

經濟現象も生の一現象であれば亦この形式を脱すべくもなく不斷の均衡巡回運動であるが、その均衡破壊も經濟則を實現せんとする結果でありその均衡恢復もまた經濟則の實現を企圖する爲であるのは云ふまでもない。即ち經濟則の均衡運動とは小費用・大效用の差額剩餘價値の均衡作用であつて、それは經濟現象のあらゆる方面に互り生産にも、消費にも、交換にも、分配にも見られる所である。

土方博士が經濟は配分であると主張せられるのも此の均衡化にほかならず、この配分思想は大熊教授によりて一層の洗練を加へられてきたが、かかる配分原理は何人も經濟主義を規範として經濟行爲をなす限り、合理化と共に必然的に到達する論理的歸結でなければならぬ。

(一) まづ消費方面における均衡則は既述の如く遠く之をゴッセンの人間行爲則若くは享樂均等則に之を尋ねうべく、近くはリーフマンの限界收益均等則に求むる事ができる。それは費用が同一なる限り物の效用のみを比較してその最大剩餘を享受せんとし、また若し費用に差異ある場合は各財を得る爲に費したる勞苦とそれから得られる快樂との差引剩餘を均等なるやう諸財の效用を安排しなければならぬと言ふ原則であつて、限界效用説がその根據となる。^{**}

* 高木友三郎博士 “厚生經濟論” (一九三四年) 266頁。

** 高木友三郎博士 “生の經濟哲學” (一九三三年) 431, 432頁。

右の一節は同書第四篇の經濟現象論第四章均衡化運動と題する第一節の『經濟現象と均衡則』といふ見だしのあるところから引いたものであるが、いふところの均衡の意味はいさゝか漠然たるものであるにせよ、こゝに述べられたかぎりでは大體においてわれわれが意味する配分均衡を考へてゐるのだといふことは疑ふ餘地がない。著者によれば均衡といふものは生産・消費・交換・分配の各部分において別々に見いだされるのみならず、それは別々の學理によつて別々に説明されるものであり、交換部面には等價關係の交換法則あり、分配部面には平均利潤法則ならびに利子・賃銀の自然率説ありといふ風である。が、これらの叙述の一大特徴は前後を通じて推理性を發揮することがないといふ一點にあるので、これを理論的述作としてとりあつかふことは斷念しなければならぬ。わたしは問題をつぎのやうに制限する。——土方博士は經濟は配分なりと主張されるといふ。わたしもまた經濟は配分なりと定義する場合が往々である。では言葉の言ひあらはしの表面上の近似によつて、土方博士の『配分思想』とわたしの配分論とが前後發展の關聯にありと主張するのは正當であらうか？

もちろん正當ではない。經濟は配分なりといふ命題はたゞそれだけではなんらの意味をも齎すものではない。必要なことは『配分』の意味内容の規定である。わたしは人類生活の歴史のうへに最も早くから秩序化したところの生活の側面を經濟とよび、その秩序の本質を物質生活における現在充足と將來充足との權衡に求め、その實踐形式を資力の配分と名づけるのである。資力配分は現在充足において分岐してゐる生活上の諸目的にたいしても實行されるのであるから、いはゞその次元は二つだといへる。わたしが經濟は配分なりといふのは「經濟の本質は有限なる生活資力の人生諸目的にたいする合理的配分である」といふ意味なのである。配分學說史考に述

べたところと異なるところはない。いはゞ最も短い言葉で表現された經濟本質論である。

おもふに高木博士の老大な著述のうち、『經濟の本質』*と題する一章のごときはたしかに力作として認められなければならない部分の一つであるが、不幸にして著者は配分論をもつばら均衡論としてのみ解釋された結果、これを現象論のなかでとりあつかふべきものと考へ、これを右にいふ『經濟の本質』といふ一章のなかで考察すべきゆゑを覺られなかつたものであらう。同章は前後七節から成り、やゝ羅列にすぎるきらひはあるとしても、内外博引の勞は多とすべく、のみならず著者の思索をくぐることの最も深かつた部分であることは疑ひがたい。もしなんらかの理由によつて配分學說史考を引照する必要があるとする以上、この一章こそ第一にその場所であるといふことに博士が氣づかれたとしたならば、おそらくそれは同時に他の博士の『配分思想』とわたしの配分學說とを結びつけたことがどんなに荒唐無稽の業であつたかを覺られる瞬間でなければならぬ。わたしは土方博士の『配分思想』が分配も交換も配給も渾然たる一つとして認識されるやうなものであるのかどうかを審かにせず、たゞわれわれが意味する『配分』の場合には、却て『分配』といふ用語を採用された一例があるといふ、二度も聽かされてはだれでも吹きだしたくなるほど單純な反證を、もういッペン繰りかへし、『生の經濟哲學』の著作者にたいする公けの警告とする。

なほ土方博士の『配分思想』がそれ自體として均衡論であるといふ高木博士の見解が正當であるかどうかはここで論ずべきかぎりではない。事態を一段明瞭にするためには土方博士の經濟學の組織内容をつぶさに吟味して讀者に報告するのがよいのであるが、事すでに十幾年の昔に屬し、博士今日の論策には『配分思想』の殘影すら認められない事態において、果たしてそのやうな過去追跡の作業に意義ありやいなや、わたしは疑問とせざるを

* 前掲書、121—170頁。

えないのである。

こゝに文献上にあらはれぬ一つの事實を述べることをゆるされたい。わたしは均衡思想を初めて學んだのは、いかなる書物からでもなくて一九二六年前後における（わたしの病後における）中山伊知郎教授との談話および通信からであつた。わたしは『生産力配分の原理』といふ前出の論稿を一九二二年以來自分のふところにしまつてゐたわけであるが、事情あつてこれを學界に發表することができなかつた。（他の機會に述べることもあらうとおもふが、恩師福田博士からこれを差止められてゐた。）うちあけていへばわたしはこの研究に多少の自信があり、そして自信を一層つよめたい氣がし、學者の検討を當時求めてゐたのである。數理經濟學の中山教授は、そのやうな意味でまづわたしの接近することを欲した、そして接近することのできる學者の一人であつた。わたしは教授によつて舊來の因果論から區別された均衡論の方法論的意義を學んだ。これによるのやうに配分原理の敘述方法に攝取しなければならぬかを考へなければならなかつた。わたしの考へたところによれば經濟學における因果論も均衡論も非規範的理論としては同一のものであり、古典派經濟學の構造はむしろ均衡狀態を前提したものと見ざるをえない。數理派において分析の窮極到達點たるべきものが、古典派においては分析の一前提なのである。拙作『配分學說史考』の結構はそのやうにして生れた。近代理論としての均衡論が經濟學のうへにもつ意義に關しては、おそらく理解の不足にもよることであらう、わたしはなほ多少の疑問又は希望を懷くのであるが、しかしわたしの配分理論が當初からして素樸ながら均衡論たる性格をそなへたといふのは主として中山教授との交友を通して學んだ近代理論の影響によるのであり、土方博士の著作の影響はなかつたのである。

これらのことは晩年の回顧録でもあるならとにかく、いまごろみづから筆にすべきことではないかもしれない。わたしは學術論文の形式としてゆるされざる個人的要素をこゝに混入したといふ非難をまぬかれなければならない。のみならずわたしは學界一般からすでに承認をうけた自分の研究事項について言葉をつひやしすぎたかもしれない。だが、わたしは田舎の學校教師であつて、直接の相手は二十歳前後の學生であり、そして學生といふものはあらゆる參考書を読み、活字で讀んだものは大抵一應信するといふ習性をまぬかれなものである。齒をもつて齒にむくいるといふ言葉があるが、活字にむくいるに活字をもつてしないかぎり事態は結着しないといふのがまづ現代の習性である。よんどころなく問題を底の底から説明

すべく、そしてふたゝびかゝる問題によつて自他ともに煩はされることのない状態をもたらすべく敢て私事をも挿入して説明をこゝろみる次第である。

高木博士による配分原理の解釋に關する問題は以上をもつて盡きる。わたしが博士の解釋を山田盛太郎氏の書評に由來すると想像するわけは簡單である。『生の經濟哲學』に引用されてゐる小著は不思議にもおなじ『配分學說史考』第一冊であつて、その後の『配分理論』でも『マルクスのロビンソン物語』でもないからである。もし博士の解釋の由來および根據が別に存在するといふことであるならば、なんらかの機會にぜひ示教を乞ひたいものだといふことを一言申述べて問題をうちきることとする。

第五 日本的マルクス主義批評の特性について

問題の重點はむしろさきにかゝげた山田盛太郎氏の書評の方にこそあるのであつて、われわれはまだ山田氏の『茲にも一人の配分學者がゐる』といふ冒頭の一句にかゝりあつてゐたにすぎないではないかと讀者は考へられるであらう。しかも右の一句が書評全體から見ればほとんどるにたらぬ枕詞にすぎないことさへ承知してをられるであらう。前掲山田氏の書評を初めて一讀された讀者は、わたしの研究にたいするマルクス主義者の批判こそ最も致命的なものではないかと懸念されるであらう。しかしさきに一言したやうに、山田氏の批評にたいしてはマルクス主義批評家諸氏の批評に一括して應酬する機會のあつたときに餘蘊なき反駁をあたへておいたのであつて、右の全文を引用掲載することこそ今度が初めてであるが、これにたいする反批判は果たされてしまつたのである。わたしはロンドン滞在中に機會があつて改造社版經濟學全集第六卷に『配分理論』と題する前後三章か

ら成る著作を寄稿し、これに長文の序文をそへた。山田盛太郎氏の批評にたいしては、第一にその序文が直接に、第二に第三章最後の節が間接に、應酬したのであつた。^{*}後者は問題の主要點を究明したものであるにかゝらず、反批評としての形式が間接的であつたためか、廣く知られてゐない憾みがあるので、いま讀者の便利のため、要點を採録し、なほ今日の所見をそへることにする。――

マルクス經濟學の目的は、『現象の變動のその發展のすなはち一の形態から他の形態への聯絡の、一の秩序から他の秩序への推移の法則』の發見にあり、その窮極目的は『近代社會の經濟的運動法則』の『曝露』にある。したがつて、その性質において非歴史的な一般規定たる配分法則をそれ自體として考察することはかれの立場がゆるさない。さればとて社會的生產の諸形態において自己を貫徹する平均法則の作用を無視して何事を説きうるものでもない。この法則が一生産形態から廢除されえないこと、この法則が經濟學の一體系から驅逐されえないことは、まさに同一である。この法則が一定の歴史的生產形態の内部に一應の安定的平均性および全體性を附與すること、この法則が經濟學の諸體系に支柱的理論および均衡原理を附與することとは、まさに同一である。

だからこの法則はかならず何等かの形において『資本論』そのもののなかに容姿をあらはさなければならぬ。――しかるに見よ、それを見失つた當時のマルクス批評家の一人は次ぎのごとくマルクス『資本論』を解釋し、マルクス自身満悦をもつてこれを承認したのみならず、『資本論』第一卷第二版の跋文にみづから引用を敢てし、その後のマルクス主義者はみづからの頭腦を勞することなくして輕々しくこれを繼承し、そして頑

* 改造社版經濟學全集第六卷、129—133頁、及び同書 261—264頁。後者の引用に際し二三辭句を修正した。なほ同一問題はすでに拙著“マルクスのロビンソン物語”においても取扱はれてゐた。たゞ表現がやゝ力弱かつただけである。同書（第一章第二節）、20—29頁。

固にその見解を墨守しつゝある。以下かゝげるのは右にいふ跋文中にマルクス自身によつて引用されてた一批評家のマルクス經濟學解釋である。――

しかしながら人或は云ふであらう、經濟生活の一般的法則は一個同一のものであり、吾々はそれを現在に適用しようと過去に適用しようとどちらでもいい筈だ。ところが、これこそマルクスの否定するところである。彼にしたがへば、かゝる抽象的な法則は存在しない。……彼の意見にしたがへば、これと反對に、各々の歴史的時代はそれ特有な法則を有してをる。……人類の生活なるものは、一定の發展時代を生きつくすやいなや、ある一定の段階から他の段階へ移りゆくやいなや、それはまた他の法則によつて支配されはじめる。一言にしていへば經濟生活は生物學といふ他の領域における發展史と類似な現象を呈するのである。……古き經濟學者たちが經濟法則を物理學や化學の法則と比較したのは、經濟法則の性質を誤解したのである。』

これらの言葉は一應マルクスによつて『彼がマルクスの眞の方法と呼ぶところのものをかくも見事に叙述し』とまで肯定的に引用されたものの一部分である。だが、この一部分がいかに助からない程度においてクーゲルマン博士宛のマルクス自身の私信（一八六八年七月十日）と衝突してゐるかは、すべての讀者の看取されるところであらう。^{*}

マルクス經濟學における諸法則が一般に生物學的であるとの解釋は妥當であるが、しかし致命的なのは別にそれ以外にマルクスにおいて物理學的な法則の並存することを見失つた點にある。『經濟生活の一般的法則は一個同一のものであり、吾々はそれを現在に適用しようと過去に適用しようとどちらでもいい筈だ』といふ見解は、配分法則に關するかぎりマルクス自身も執らざるをえない見解であり、たゞかれは『どちらでもいい筈

* クーゲルマン博士宛 マルクス書簡については前掲“マルクスのロビンソン物語”24,25頁参照。

だ』などといふ生ぬるい言葉づかひをせず、『自然法則は總じて廢除されえざるものである』と斷然いひきつてゐる。しかるに右の一批評家の見解によれば、かゝる一般的法則こそ『正にマルクスの否定するところである』といふのである。かくも驚くべき誤解を含むところの批評を、マルクス自身が肯定的に引用した結果、『資本論』における經濟法則の性質に關する片手落ちの解釋が一般に普及してしまひ、配分法則への理解の道は今日にいたるまで永らく封じられたまゝであつたのである。

われらはまづこの封印を打開しなければならぬ。クーゲルマン博士宛の問題の書簡のなかでマルクスはいふ、『社會的勞働を一定の比例に配分することのかゝる必然性は、決して社會的生産の一定の形態によつて廢除されるものでなく、むしろたゞその現象の仕方を變ずるのみ』と。またいふ、『勞働のかゝる比例的配分が自己を貫徹するその形態は、まさにこれら生産物の交換價值である』と。そして最後にまた『資本論』のなかでかれはいふ、『勞働の生産物の偶然的な且つ絶えず動搖する交換關係のうちにおいて、それらの生産物のため社會的に必要な勞働時間が、規制的な自然法則として自己を貫徹することは、あだかも家が人間の頭上に崩れ落ちる場合の重力の法則の如くである』と。——人間の經濟生活における一般的規定としての配分法則が、生物學的でなくしてむしろ物理學的であること、またその作用の嚴肅にして必然的なる、まさに『重力の法則』のごとくであることは、マルクス自身の右の表現に盡きてゐる。

これを要するにマルクス經濟學なるものはいはゆる發展法則以外に物理學的な均衡法則をもつのであつて、この法則の本體はマルクスによつて十分に究められてをらず、マルクス主義者によつて從來無視されてゐたものだ

といふことができる。この法則一箇をとりあげて吟味をくはへるといふやうな仕事は、それだけとしては極めて狭い作業であつて、他の諸法則との關係すら一應きりはなして考察されなければならず、いはんやマルクスの體系にとつての自己批判たるべき獅子身中の蟲ではない。この研究を目して『これ、生産力の展開並びに階級闘争の展開を基準とするマルクス學說の正反對をゆくもの』とする山田盛太郎氏の解釋は逆上的である。わたしは『マルクス學說の正反對』をゆく諸學說の存在を別に知つてゐる。だが配分學說の研究はそれだけとしてはたゞ一箇の法則に關する研究であつて、振幅において到底マルクスの諸法則の規模に對應しうるやうなものではない。それはむしろ『資本論』自體にとつて一つの躰であるにすぎない。この研究の意圖を過大視したのみならず、この研究の規模を過大視したことにおいて、山田氏はドンキホーテによく似てをられるばかりではない。『經濟學批判序說』のなかにあるマルクスの言葉をそのまゝ使つてみたい幼童的な衝動が同氏の全身を支配してゐるのである。配分學說の研究が現存社會の『永遠性と調和』を説くものだといふのがそれである。マルクスは『序說』のなかで、『主體はいつも人間であり、客體はいつも自然であるといふことから生ずるところの、かの統一に心を奪はれて、本質的〔歴史的〕の差異を忘却しないやうに』讀者を戒め、そして『このことの忘却のうちに、例へば現存の社會諸關係の永遠性と調和とを證明せんとせる、かの近代經濟學者のあらゆる智慧が横はつてゐる』と述べたのであるが、われわれの配分學說研究の動機にはいはゆる『近代經濟學者のあらゆる智慧』が秘められてゐるといふことになるのであらう。これが山田盛太郎氏のマルクス主義的解釋である。だが、この解釋をもつては配分學說の研究が計畫經濟の原理的研究の方向へ直進しなければやまないといふ一面の性格を説明することができない。マルクス主義者にとつては、マルクスがリカアドオやジェヴォンスと並べられるといふそのこと

がもう我慢のできないことである。それらはすべて『マルクス經濟學とブルジョア經濟學との對立の抹殺を意圖する』以外のなものでもないのである。赤くなつた腫物のごときこの神經過敏はそもそも何から來たか？

われわれは科學史のいかなる時期において曾てこのやうなものを見たことがあるか？

科學者が同時に一箇の政治主義者であるといふことは、われわれはかならずしもこれを一般的に否定することはできないし、また一般的に非難すべき理由もないであらう。——だが、われわれはいはなければならぬ、科學そのものの中へ政治主義を導入することは一般的に否定されべきであると。政治がそれによつて科學の内部へ前進すればそれだけ科學は後退するのであり、いかなる政治にもせよ、およそ政治主義が科學の本質を横切つて、それが科學をそこねないで通過することは絶対にありえないのである。科學の運命はつねに政治と並行するであらう。しかし科學はそれ自身の道をもたなければならない。山田氏の批評態度のごときは、政治主義的逆上によつて科學的な問題そのものの意味を理解する餘裕を全くうしなつた一例であるばかりではない。同時に、經濟學上の多くの研究に普通な部分的性質といふものをわきまへない一例であるといふことができる。

こゝに研究上普通に見られる部分的性質といふのは、およそ科學者が研究の特定領域における一定の展望をたもちながら、しかしその或部分に自己の研究的作業の部署を決定し、科學の全建築にとつてはたゞ一つの室房あるひは廻廊にあたるものの研究に身をゆだねるといふ自己限定の状態をさす。古往今來、最大多數の科學者は實にそのやうにしてのみ科學上眞に價値ある業績を遺し、科學の發達に寄與することができたのであつて、このことは將來といへども變ることはないであらう。いかにも或種の研究は、その動機において當初から部分的性質たるにとゞまることができない場合もあり、また部分的性質たる筈のものが、自己發展の結果、知らずしらずその

科學にとつて全體的な研究に轉化することも多々あるべきであるが、近代科學といふものは、『科學』といふ日本の譯語そのものが美事に語るところそれ自體が分科學であるばかりではない、その個々分科の發達はまた多數研究家による個別の細分的研究に須たずしては期待すべからざるものである。經濟學が科學の名に値するならば、これもまた右にいふ近代科學に共通の性質をおびたものであり、部分的性質をもつた多數の研究の綜合的發展なくしては前進すべからざるものだといはなければならないのである。

さうなのである。しかるに經濟學の研究領域では、——これは別の機會に指摘したことであるからたゞ一言だけにとどめるが、日本ではだれもかれもが根本から基礎工事を始めようとする態度において著しく哲學に似通つたものとなり、現實の科學内容にたいしては超越的に批評的であるか、あるひは懷疑的にして追求力不足ともいふべき狀態に陥つてゐるのである。放縱・慢心・懈怠がその本質であり、學位論文のごときもしばしば作文的なものの混入をみとめざるをえない。このやうな事態のもとでは十人の經濟學者から十箇の經濟學體系が期待され、Aが何か書けばそれはもうAの經濟學、Bが何か出せばそれはBの經濟學といふことにならざるをえない。實に日本の經濟學界はそのやうな風潮のなかを幾年となく経過しつゝあるのであつて、山田盛太郎氏が『片々たる小冊子』にすぎない『配分學說史考』を一つの新建築の出現のごとく感じられたといふやうなことも、右にいふ日本學界の特殊事情を背景として同氏の頭腦の型を考へてみなければ完全に理解することはできないであらう。山田氏は單なるマルクス主義者ではなく、一九三〇年前後における日本的マルクス主義者であるといふことを、——すなはち歴史的な一つの型であり、きはめて日本的な型であるといふことを。

第六 マルクス・ロビンソンの再發見

第三に慶應義塾の伊東岱吉教授の批評である。だが教授の批評に敬意を表するにすぎだち、第一にわたしは興味ある一事を讀者に報告しなければならない。拙作『マルクスのロビンソン物語』はマルクスの價值法則の解釋にゴッセンの第二法則を導入するといふ一つの試みであり、それはまた價值法則の本質としての配分法則なるものの一考察であつたわけであるが、そのやうな研究は決してわたしひとりの獨占物でありえないといふことが日本において證明された。ほかでもない、伊東教授は拙論の發表よりおくれること約三十三ヶ月にして殆ど同様の見解を慶應義塾大學理財學會の機關誌三田學會雜誌に發表されたのである。——勞働價值説における窮極の問題は勞働と價值との必然的關聯の證明にある。マルクスによつて把握された價值形態は、いかなる時代の社會的生產をも貫徹する一つの自然法則（配分法則）が資本制社會においてとる一定の現象形態である。したがつてこの配分法則の理解こそは資本制社會における價值形態の理解の前提であり、マルクス勞働價值説を了解せしめる鍵であるといふのが教授の根本見解なのである。^{*}で、さういふ見解のもとに、しかしわたしの『物語』にたいしては豫めなんらの關心を示すところなしに、であるから全く新たに獨立に、『勞働價值説の基本的考察』と題する論文を展開されたのである。^{***}

この論文は約三十五頁にわたる長篇であるが、そのまさに終らうとする最後から二頁ばかりのところの一つの註で、拙作『マルクスのロビンソン物語』が一回だけ引照され、その引照は單に或る一點についてわたしの意見に『賛成しかねる』といふことを述べるだけのものではあつた。或る一點といふのは後段で説明するごとく

* 伊東岱吉 “勞働價值説の諸問題” 三田學會雜誌第二六卷第八號，75頁。

** 伊東岱吉 “勞働價值説の 基本的考察” 三田學會雜誌，第二六卷第三號，79—113頁。

であるが、こゝでわたしは一つの感想をさしばさむこととする。おもふにわが伊東教授のこの場合における研究發表の態度はかならずしも賞讃に値するものではない。教授がたまたま拙著の存在を知りその内容を承知してえられるといふことは右の引照によつて明白な次第であるが、根本的に同一性質の研究がすでに同一國內においておこなはれてゐる場合、殊に普通の言ひ方では一つの發見とでもいへるやうな新しい見解が發表されてゐる場合、そのあとに、それと根本的に同性質の見解を披擲しようとするものは、まづ順序として先行の研究をとりあげ、これにたいする一應の態度を明かにすることが一般に學者の義務ではあるまいか？ 義務といへばかたぐるしい言葉であるが、むしろさうすることが形式上からも必要なものではあるまいか？ それによつて讀者も新たに出現した論者の主眼點を容易につかむことができ、先行者もいちはやく自己を顧みる機會をえるのである。われわれは日ごろ科學研究における協同性と繼承性とを強調しつゝあるものであるが、せまい國內においてすら容易にその實のあがらない實情はなげかざるをえないのである。

感ずるまゝを述べさせてもらへば、わたしは伊東教授が右の研究を發表されるまでに、二三の拙作から幾何のもの肯定的に攝取されてゐるのかを知りたいのである。わたしはもちろん教授にたいしてまづ拙作の批評から出發されべきであらうなどと主張することはできない。だが、きはめて性質の類似した研究では一般に兩者の相異點の強調がつねに必要であり、そしてその強調をなしうるものはいつも先行者でなくて後來者であるといふことは、すくなくとも注意をうながす必要のあることだとおもはれる。後來者はむしろそのやうにして眞に後來者たりうるわけであり、しばしば先行者をくつがへして科學を前進せしめるにいたるのである。必要なものはつねに摩擦であり軋轢であつて、回避や獨善や默殺や密輸入ではない。論争なくして科學研究の協同性はありえないの

である。

もちろん伊東教授の研究はもととわたしの著作などとは無關係に獨立に成立したものであるかもしれないが、研究途上において慮らずも拙作が一顧をうけたといふ程度のことかもしれない。科學研究の領域においてはそのやうなことが實際起りうべき性質のものであることは曾て拙著の序文にも述べた例があるごとく梅井義雄氏の場合を考へてみれば明白である。^{*}しかしわたしがこゝでつぎの一事に伊東教授ならびに讀者の注意をうながすことは決して慢心ではないとおもはれる。梅井氏がだれよりさきに問題を發見されたといふ事情は主としてわたしの處女作『配分原理』の十分な理解を前提としたのである。わたしが梅井氏について、しかし梅井氏と獨立に同一問題を發見したといふことも、まづたく『配分原理』の自己理解に根ざすのである。『資本論』のロビンソン理論とゴーッセンの第二法則とが接合されるといふ運命の豫感^{*}は、實は『配分原理』そのもののなかにみちみちてゐたのであつて、『配分原理』から『マルクスのロビンソン物語』までの距離といふものはまさに踏み板一板なのである。が、しかし前者なしに後者に到達することは事實において不可能であつたといふことである。

すでにゴーッセンの第二法則と勞働配分論とを結びつけることによつて二つの價值學說の內面的關聯をたどるといふ試みは、その成敗はともかく、ツガン・バラノフスキーにおいて夙に見られるところであつて、科學上同種の考へ方が種々なる人々の頭腦に前後して泛びうるものであることは、限界利用思想の發生史そのものが大いなる實例である。伊東教授の研究發表から一年ほどおくれて、おなじ大學の小泉信三博士が、これまた伊東教授とは獨立に價值問題にたいする根本的な綜合見解を述べられた際、ほど同様の思考方法を示されたことも、われわれの記憶にあらたなところである。ツガンの說についてはわたしは別の機會に餘蘊なく論じたつもりである

* 拙著“マルクスのロビンソン物語”(一九二九年)序文、梅井義雄氏に關する一節(9頁)を見よ。なほ梅井氏は現に“戰爭・財閥・軍需工業”の著者と同一人である。

し、小泉博士の綜合説にたいしても卑見の一端を忌憚なく發表したのであるから、こゝではそれらに觸れる必要はない。^{*}

たゞわたしはおもふに、ゴッセンの第二法則が從來理解されてゐた程度のものでして把握されてゐるのでは十分でなく、まづこの法則が表現されてゐた基本概念および命題そのものを一旦破壊し、できるならば一切の言葉を忘却し、生活事實の直觀から概念の再構成をなしとげなくては眞に用をなさないのである。ツガンの失敗も、ブハーリンのツガン批判における本質的な失敗も、原因の根本はそこにあるのではないかとおもはれる。いはゆるゴッセンの第二法則とマルクスのロビンソン理論の結合といふやうな科業上の些末な一作業といへども、それが成立するまでには相當に長い思索の地下行程が必要だつたわけであつて、——事の成るは成るの日に成るにあらず、それは決して忽然と生れたものではない。このやうなことをみづから述べるのは一方から見れば著作者として慎みのない態度であることを承知してゐるのであるが、しかし科學的研究といふものの成立が一般にどれほど厄介なものであるかといふことを、こんな些末な一例についてなりとも讀者によつて了解してもらへるならば、この告白も無用ではないとおもはれる。伊東教授の研究がいかなる行程を経て現に見るやうな歸結に到達されたかはわたしの知るあたはざるところである。

十九世紀末葉以來、勞働價值説と限界利用説との綜合を企てた學者の數は幾十に達するであらう。われわれは言語の障壁によつて諸國の狀況をつまびらかにする自由をもたないが、シュパン教授が曾て列舉したやり方によれば、ツガン・バラノヴスキー、ゲレスノフ、オッペンハイマアなどの『マルクス主義者』やロバート・リーフマンなどまでがさうである。最近二十年間におなじ問題に接近した日本學者の數だけでも十指をくだるまいとおも

* 前掲“經濟本質編”第五章並びに同第四章第十一節（245—247頁）參照。前者はツガン批判、後者は小泉説の批評である。

はれる。マルクス・ロビンソンの發見はいはゞコロンブスの卵のたぐひであつて、二番目の人がおなじ卓上に卵を立てた時にはその意義は一變する。わが伊東教授によれば限界效用均等法則は『一定の修正を加ふれば』マルクスの配分法則を『解明』し、限界效用學派の考へ方は『却てマルクスの勞働價值説を支持し、補綴するものであることに驚かされる』といふのであつて、教授自身、問題の鍵を發見して驚愕された様子は『驚かされる』といふ言葉のうちに窺ふことができる。たゞ、教授が『驚かされ』たのは第一の卵によつてであるか、第二の教授自身の卵によつてであるか、あるひは二つの卵の並立に『驚かされた』のであるか、それらの事情を窺ひ知ることとはできない。長篇論文ではあるが、その點をうかがひ知ることのできる場所はない。しかし同論文にはわれわれの慣用する『配分』『比例的配分』『勞働配分』『勞働配分法則』『個人的消費秩序』などといふ種類の用語が頻りに見え、意味内容もそれぞれ異なるものでないやうにみえるので、われわれとして親しみをおぼえることはなみなみでない。いまは教授の研究内容を紹介すべき餘裕がないので、たゞその輪廓と性質の一斑を右のごとく讀者に報告するにとどめ、そしてそのなかでわたしが蒙つてゐる批評の部分にたいしては敬意を表し、なほ伊東教授のマルクス主義者ばりのマルクス擁護の態度にたいしては一言忌憚のない評語をくはへることとする。

いつたい、伊東教授の研究態度上にあらはれた科學的協同の否定に近いやうな一傾向については、すでに指摘したとほりであるが、わたしはこれをもつて慶應義塾の諸學者をつらく一つの學風であると斷定することを躊躇しなればならぬ。伊東教授がマルクスを『眞に救は』ねばならないとされる態度は、いはゆる「主」マルクスに誤謬なしとする人々と軌を一にするもののごとくであり、先行者無視の前述の態度のごときも實は一つの『階級的』態度なのではないかとおもはれる。わたしは教授が政治主義者であるとい瞬も信じてゐるのではない。だ

が言説の發表態度における紙上マルクス主義の實例は、わが學藝の各方面に見るところなのである。

第七 經濟配分比例の規制要因は何であるか？

さて、拙作『マルクスのロビンソン物語』にたいする伊東教授の批評は一言につきる。それは全體的な批評ではなくて數語から成る一辭句の解釋の問題にすぎない。わたしの解釋にくはへるに新たな一解釋を追補しようとするものであるが、わたしは喜んで同意せざるをえない。だが、その結果として何事かが起るだらうと想像するのは問題の性質を理解したものではない。

問題はかうである。——マルクス・ロビンソンの勞働配分では、かれの總勞働のなかで『どの機能がより多くの範圍を占め、どの機能がよりわづかの範圍を占めるか』といふ問題はマルクス自身によつて明快な説明があらへられてゐない。そもそも勞働の配分比例を決定する基本要因として一般に考へられるものは、1自然および收穫法則、2生産技術、3欲望體系および利用法則、4總勞働時間等々といふやうなものであるが、これらのいづれか一つの要因に生ずる變化は、その要因の種類をとはず、かならずや總勞働の配分比を變化せしめなければやまない。またこれを社會的總勞働の場合についていへば、所得の分配狀態（生産手段の分配狀態がその基本である）が右にあげた要因以外の重要な一つとして加へられなければならない。勞働配分の社會的な均衡狀態なるものは、人口の増加によつても、技術の發展によつても、社會的欲望の變化によつても、國家による財政活動の急變によつても、擾亂されざるはないのである。しかるにこの問題に關しては最も素樸な、しかも極めて不完全な考へ方しかもあはせなかつた十九世紀中葉のマルクスにとつて、ロビンソンの勞働配分に理論的透徹が必要

であらうなどとは考へられることではない。かれは無雜作にかういつた、——ロビンソンにおける勞働の配分比は『目的とする効果を得るために克服すべき困難の大小によつて定まる』と。このやうな叙述は今日から見れば、配分問題にたいする答としては、答にして答にあらずといふより外はない。

こゝに述べるのは單なるマルクス批評ではない。『われらはマルクスにおける配分關係の分析は極めて不完全であり、素朴であり、わづかにして直ぐ挫折してゐることを知つた。この一點におけるかれの科學的分析力のあるからさまな限界は、かれが生活し、そして讀み、且つ思索した時代の、經濟學の一般的な限界であることを考へなければならぬ。』配分問題についての理論的透徹は、いかなる問題についてもさうであるが、問題そのものの意義が闡明されない時代に存在するわけではない。マルクスのロビンソン物語に比べれば、むしろおなじ場所ですれに續いて述べられたところの『自由人の團體』についての雛型的な説明の方が遙に理論性をもち、そして或程度の分析に堪へるのである。^{***}拙作『マルクスのロビンソン物語』の中心的大部分がロビンソン分析ではなくて、『自由人』社會の分析に終始してゐるといふ事實に徴しても、このことは理解されなければならない。その場合においてさへマルクスの分析は寸時にして挫折したのである。ロビンソンにおいては、たゞ『必要そのものが彼を強制して彼の時間を彼の異なる諸機能の間に正確に配分せしめる』といふ一筋の命題が、これらの諸關係のうちに『價値のあらゆる本質的な規定が含まれてゐる』といふもう一つの命題とともに眞に永久に生きる。その他の大部分はマルクスにおける例の文學的要素にすぎない。總勞働の配分比例はいかにして決定するか？ マルクスの答は答にして答にあらず、——『目的とする効果を得るために克服すべき困難の大小によつて定まる』といふ以外にない。

* 前掲“マルクスのロビンソン物語”(第一章第五節), 55頁.

*** 前掲書第一章第四, 五, 六節, 32—57頁を特に参照せよ。

假想の孤立人の勞働配分を規制する基本要因として挙げられるものが二三にとゞまらないことはすでに指摘するとほりである。だが、その主動因として意慾の體系をあげるといふことは、しばしばマルクス自身の態度であつたことを知らなければならない。『必要そのものが彼を強制して彼の時間を……配分せしめる』といふ冒頭の一句がそれを示す。さらにクーゲルマンあてのかれの有名な手紙がそれを示す。配分比例の規制的要因として意慾の體系が重要なだけではない。配分諸部門の分岐、そのものを規制する要因として意慾の體系は最も主動的であることを知らなければならない。^{*}

人間の諸生産はその環境たる自然によつて一層根源的な規制をうけてゐることも固より看過すべからざる事實であり、エスキモーが主として漁撈に従事するといふ現象はその規制の單純な現れにほかならない。さらに生産配分比の規制要因の一つとして生産力・生産技術もまた加算されざるをえない。技術の一發展は新たな生産部門を起し、あるひは舊い部門を廢滅せしめ、あるひは一部の勞働配分量を激變せしめるかもしれない。變化の方向は或時は増加に或時は減少にむかひ、或時は變化しないであらう。いはゆる欲望の弾力性によつて決定せざるをえないからである。技術の發展により、したがつて費用の低下によつてその生産部門に勞働配分量變化の契機が生ずるのはいふまでもない。しかし量の變化そのものの規制にあづかるのは欲望の弾力性以外のものではないことを知らなければならない。技術または生産力が生産配分における一般的規制者であると主張するのはいさゝかもさまたげない。だが、そのみが『終局的』な要因であると主張することは問題の解明のためにいさゝかも役だつものではない。むしろ配分問題にたいする理論的理解の缺乏を露呈する以外のものではない。

伊東教授の力調點は、右にいふ技術または生産力が勞働配分における『終局的規制者』であり、社會的慾望は『被

* 拙著“經濟本質論”第三章、産業體系と經濟配分、第三節、計畫經濟における技術と經濟（殊に154, 155頁）を参照せよ。

規制者』であるといふのに盡きる。『社會の生産諸力の發展は社會的必要労働時間を變化せしめ、この終局的規制者の變化は労働配分の變化を惹起せしめずには止まぬ』と。おそらく何人もこの見解に異存のあるものはあるまい。しかしこの單純な見解はわたしの蒙をひらくがごとくに述べられてをり、そしてそれがわたしにたいする批評の骨子の一つ（他にもう一つある）にさへなつてゐるのは意外といはざるをえない。わたし自身が舊來それについて何を述べてゐたかを示すために、わたしは殊更に最も古い作品である『配分原理』から一節の引用を敢てしてもよい。その一節とは『國民または世界の一切の産業を殆ど無數にまで分割し、さらに愈々分割せんとしてゐるものは確に人類の欲望であり、欲望は生産秩序にたいする至高の規制者ではあるけれども、しかもその規制は社會の生産力の増進によつて更に規制されつゝあるものであることを看過してはならぬ。』といふのである。***
 あらゆるものの主動的要因として『生産力』をもつてくることはマルクス主義に通例の方法である。だが、あらゆる問題の分析がその方法一つで遂行できると考へるぐらゐ輕信的な態度はない。

配分比例規制の問題に關して、わたしがわたしの批評家から示教をうけなければならぬやうなものは何もないことが明白となつた。のみならずこの機會に、労働の配分比例規制の問題はわたしの批評家が考へてをるほど簡單な理論問題ではないことを指摘することができた。各國民の所得分配状態や國家財政活動における豫算の規模・方向等によつても著しく左右されるものであることも指摘した。わたしの批評家がいかにも簡單な考へ方をしてゐるかを示す材料が必要なら、『生産力が各生産部門に於て均衡的に發展する限り、労働の比例的配分に變化を生ずることはない筈である』といふやうなかれの推理を引用することもできる。およそ簡單すぎるといふことも、程度を越せばたゞの誤謬と化する一例にほかならない。

* 伊東岱吉，前掲論文，三田學會雜誌第二六卷第三號，109頁。

** 同上，111頁。

*** 前掲“マルクスのロビンソン物語”（第二章配分原理），112，113頁。

いつたい、わたしは近代理論としての均衡論の性格についてはむしろ多少の疑問をもつものであり、すくなくとも配分問題のとり扱ひにおいて配分比例規制の諸要因を考察する場合には、それら諸要因の意義および性質をそれぞれ比較考察することほど慎重な態度を要するものはないと信じてゐる。わたしはまだこの問題に没入したことはなく、いづれ没入しなければならぬまいと決心はしてゐるものの、あるひはそれが誤つて数理經濟學の方法にたいするわたしの具體的な批評となるのではあるまいかといふ豫感をもつ。注意すべきは次ぎのことである。配分比例の規制要因に關する考察は、問題の角度を更へるにしたがつて幾通りでも推理の系列が生ずるのであり、だからして『終局的』といふやうな觀念によつて幾つかのうちの或一つの推理の系列に執着するのは事物を到底具體的に把握するゆゑんではないといふこと、——一般に辯證法的といふのは、決してさうした一面偏執を意味するものではあるまい。これだけ述べておいて、最後にもう一度ロビンソンの問題にかへる。

第八　なにゆゑにマルクスを讀むか？

マルクス・ロビンソンにおける理論性の稀薄さは、いかなる方法をもつても救ひうるやうなものではない。『資本論』におけるロビンソンの世界の假想が、果たして勞働配分論の單純な雛型としての意識をもつてのみ設けられたものであるかどうかさへ、窮竟的には疑問の餘地なしとしない。それにつゞく幾つかの世界が、かならずしも勞働配分論の別々な雛型として述べられてゐない事實をかへりみれば、疑問は容易にとけがたと見なければならぬ。

われわれはしかし當面の問題をマルクス・ロビンソンの理論的稀薄性に制限し、その稀薄性を救はうとして企

てられるすべての『積極的解釋』は徒爾であり、科學的に無價值であるといふことを説明しなければならぬ。

いつたい、一人の科學者の著作内容が、あらゆる誤謬と不完全からまぬかれうる場合があるものだといふ信仰ほど、非科學的なものはこの世にない。すべての思想家がその思想と任務とのうへに一定の限界をもつといふことはしばしば説くところであるが、同時にすべての學者・思想家は所説そのもののなかに誤謬と不完全とを包蔵してゐるのである。經濟學は文學の一種のごときもので科學の一種でないといふならば、『資本論』の部分的誤謬を指摘することは、態度そのものにおいてすでに間違ひであらう。だが、いやしくも『資本論』をもつて科學の書と認めるかぎり、これにたいして辯護のみに終始することはすでに科學者の態度を離れたものであるといはざるをえない。われわれがマルクスをもつて經濟學說史上の天才の一人と認めるのは、あだかもマルクスが十八世紀のフランス人ケネーをもつて一人の天才とみなしたのとおなじ態度である。一人のなかに天才を認めることはかれの業績のなかに不完全と誤謬を認めないことではない。殆ど一世紀にも近い昔の學者の、しかも經濟配分などといふ理論問題が獨立の意義を全くもたなかつた時代の著作の、しかも氣まぐれ同様ともいふべき挿話的説話が、どうして今日の科學的な分析のメスに最後まで堪へうる筈があらうか？ また、どうしてそんな説話が今日の銳利な推理方法と矛盾なしに調和せしめられうる筈があらうか？ およそ常識をそなへてゐるほどの人間ならば、そんなことは到底不可能だといふことを第一に直観によつて知らずにゐられないのである。

わたしは『マルクスのロビンソン物語』の結末において、利用理論としてのゴースン法則を導き入れる必要から、ことさらマルクスのその場における *Misuse* (利用、效果) といふ一用語に讀者の注目を乞ひ、いはゞこの用語に因んで配分論における利用學說の地位を暗示しようとした。

『勞働配分の規制者は勞働そのもののみに存するのではなくして、勞働諸部門においてその配分を要求しつゝある「利用效果」であるといふことが、マルクスによつて幾分なりとも指示されてゐる』と述べてゐるのが、すなはちそれである。が、このやうな『解釋』の挿入といふものは、次ぎにそのなかへ讀者を導入しようとする最も重要な見解への推論の轉轍機たる以外、いかなる科學的意義をも有するものではない。マルクス・ロビンソンの配分論が同義反復に墮してゐることや、分析がすぐに挫折してゐることをその場所で指摘したわたしのマルクス批評にたいし、マルクスのため抗辯につとめられてゐる伊東教授は、その抗辯によつて『マルクスは眞に救はれるものと思はれる』といふ所信すら述べてをられるのであるが、一人の學者を『救』ふことが科學の課題なのではないといふことをわたしは警告せざるをえない。ロビンソン理論にかぎらず、經濟本質論としてのマルクスの配分學說のすべての部分が、今日われわれの眼から見ても、幼稚な、未發達な、曖昧と不透明の藪につつまれた蛆であつたといふことは掩ふべからざる事實であり、事は決してロビンソンの複合解釋などによつて決濟するのではない。われわれの目的は經濟配分問題の理論的性質を展開するにあるのであつて、スミスやマルクスやゴッセンが終局的な問題なのではない。われわれの研究目的は經濟そのものであつて、經濟學文獻自體ではない。スミスも、マルクスも、ゴッセンも、その他のすべての文獻も、たゞ當初の目的に到達しようとするための手段以外のものではない。實に科學發達の停頓は過程そのものの興味にとらはれ、現實の問題をも目的をも忘却してしまふ瞬間からはじまるのである。

とりあげて論ずるだけの意義があるかを疑ふのではあるが、なほ伊東教授によればわたしはマルクスにおける『社會的必要勞働時間』の二義を『混同』してゐるのであるといふ。『各部門への勞働配分量と、生産物一個當り

の技術的必要労働時間とを混同することは甚だしき誤りであつて、この誤謬はロビンソンを論ずる間はさほど目につかないが、一度議論を社會に移す時には直ちに重大なものとなつて来る。蓋し、各部門への労働配分量は社會的欲望範圍に依つて決定されるが、各貨物生産の爲めの技術的必要労働時間は、社會的欲望とは獨立に、生産力の發展に依つて決定せられるからである。』と。^{*}しかしこの問題をわたしは混同するところでないといふことは、わたし自身が特にマルクスにおける右の二つの意義を明かにするために、どのやうなことを拙著の序文に述べてゐるかをこゝに引用すれば十分である。伊東教授がわたしにくはへられた批評の骨子ともいふべき第一の點については、不思議にもそれがわたし自身の著作から抜きとられたのも同様のものであることはすでに見たとほりであるが、批評の第二の骨子ともいふべきものが、またも同様のものであるといふにいたつては右の不思議を二倍にする力があるであらう。わたしは前述の序文のなかでかう述べた。――

なかんづくマルクスの理論の看過しがたい缺點の一つは、『社會的に必要なる労働時間』といふ重要な範疇が、事實上、截然區別さるべき二重の範疇――技術的および經濟的――であるにかゝはらず、この區別を闡明することなしに、兩者をあだかも同一なるもののごとく取扱つたことにある。經濟的範疇としての『社會的に必要なる労働時間』は、各商品のそれぞれの社會的必要量の生産のために配分さるべき社會的總労働の各配分量の意味であり、したがつてこの範疇が完全に理解されるためには、マルクスの配分法則にたいする完全なる理解が必要である。^{**}

* 前掲論文所載三田學會雜誌，111頁。

** 經濟學全集第六卷（拙著配分理論所載），128頁。

いふまでもなく『社會的に必要な労働時間』の意味は從來貨物の一單位を標準とする社會技術的な意味に解されるのが普通であつたにたいし、實はマルクスにおいては二重の範疇であるといふことを指摘したものである。この範疇の二重性がすでに孤立人の想定から始まるゆゑんは、わたしがおなじ著作の第二章に特に一節を設けて詳論したところであり、伊東教授がしばしば使用されてゐる『配分量』といふ用語のごときにしても、疑もなくこの場合のわたし自身の造語であることを指摘せざるをえないのである。^{*}そこでマルクス・ロビンソンにおける『克服すべき困難の大小』といふ言葉の意味は、わたしのいはゆる『技術的』範疇としての必要労働量の意味に解釋したいといふ教授の意見ならば、わたしといへども容易に同意を表すところである。たゞしその結果として何事かが起るだらうと想像するのは問題の性質を理解したものでないといふことも初めに斷つたとほりである。たゞこの問題についての正當な見解を確立すべく努力した筈のわたしは、逆にこの問題の所在すら知らない人間のごとく一批評家から論評されるといふのはやりきれないやうなものである。その批評家が慎重性のない人であつて、わたしの著作の全體を知らずに、たゞ二三行を拾ひ讀みしたものにすぎないとかいふ場合ならば別である。伊東教授が相當に拙著を讀みなしてをられることは配分論における教授の用語や用語例がわれわれとよく共通してゐることからもほど察しうるところなのであつて、わたしは教授の批評態度を目してすくなくとも拙著にかゝはるかぎり科學者として賞讃に値するものだといふことはできない。かゝる態度はすでに述べた『階級的』態度の一種であり、それによつてこの國の科學的研究の進歩が阻害されたことは決して輕少ではないのである。わたしは尋ねたい、伊東教授はなにゆゑにマルクスといふ一人の學者にのみ執着するのかと。かれの經濟學をもつて經濟學の至高至醇のすべてであると信じてゐるのか？ 内心かれの革命主義を牽するがゆゑに、表面

* 前掲書、200—205頁を見よ。

かれの經濟學をも奉ずるといふのか？ なにゆゑにマルクス理論の『挫折』を承認するのに堪へられないのであるか？ なにゆゑにマルクス・ロビンソンを救はなければならないのであるのか？ ——教授は一應これらの動機を反省される必要があるであらう。マルクス經濟學の純潔を擁護し、その無誤謬無缺點を主張する必要は政治主義者にあるのみであつて、科學の世界には存在しないからである。

くりかへしていふが、われわれの問題はマルクス・ロビンソンそのものにあるのではない。すでに伊東教授は配分法則の重要性を認識されたのみではない。主として、その性質を論ずるために前述の長篇論文さへ發表されたのである。日本學界における配分論上の關係文獻としてみれば、極めて大きな寄與たるをうしなはない。いはんや山田盛太郎・藤井敏夫^{*}その他の批評家諸氏や高木友三郎博士などの問題解釋をかへりみれば、その本質的な理解の透徹において、かれとこれとは比較を絶するといふも斷じて過言ではない。もし一言希望を述べることをゆるされるなら、わたしは少壯伊東教授が自家の配分問題をマルクス經濟學の領内に封することなく、潤達にして自由な精神をもつて現實直觀の地盤のうへに展開され、他方あらゆる學派のなかに同種の理論を探索し、そしてあらゆる他の理論問題と同問題との基本關聯の分析にまで進展されることをいのりたいのである。わたしが一批評家の微々たる批評にむくいるために非常に多くの言葉をつひやしたのは讀者の意外とされるところであらう。だが、このやうな方法によつてわたしは同時に幾つかの目的を直接間接に果たしたと信ずるのである。

經濟配分の問題に關する日本諸學者の理解ないし見解の狀況について總括的な評論をこゝろみる場合は他にあらにちがひない。宮田喜代藏教授・佐原貴臣教授の書評^{***}をしばらく別とすれば、わたしは故福田德三博士並びに赤松要教授からうけた拙著批評をもつて最も問題の困難なる部分に穿入したものと認め、次號ではつゞいて兩家

* 三木清氏主宰「新興科學の旗の下に」に拙著批評を發表した匿名氏、前掲「マルクスのロビンソン物語」序文參照。

** 宮田喜代藏「大熊信行「マルクスのロビンソン物語」」、『國民經濟雜誌』第四八卷第二號、佐原貴臣「大熊教授著「配分理論」」本誌第三號。

*** 福田德三著「厚生經濟研究」（一九三〇年）152—183頁。

の批評に即しながら二三問題の考察を深めるであらう。なかんづく赤松要教授の問題提起は、配分問題と密接な關聯を有する一二の理論問題について、これらをいかにとり扱ふべきかといふ重大問題の解決を迫るものがあり、この問題に答へることは、同時にわれわれの配分理論の自己限定を深めるばかりではない、現代の理論經濟學の基本構造にたいするわれわれの疑問を一段と具體的に述べることとなるであらう。拙著『經濟本質論』は教授の批評に答へるべき場所をもつ筈のところ、紙幅の都合上、わづかに補註の形式においてその責の一部を果たしえたりせず、教授にたいし禮を失すること多大であつた。幸にして次ぎの機會に十分に教授の批評に酬いることができれば、わたしはその表題を『經濟配分と分配問題』とするつもりである。故福田徳三博士から受けた批評の一要點もまた分配問題に關するものであり、わたしはこの兩批評家の所見を次ぎの機會に一つの文章において論評することに歡びと満足とを禁じえないものである。一九三七・一〇・二五

* 赤松要“經濟生活の綜合的把握への管見”國民經濟雜誌 第五五卷 第二號。